様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 22 年 5 月 2 日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：２００７年～ ２００９年
課題番号：１９５１９００１
研究課題名（和文） ロシア帝国南部辺境のムスリム統治機構と対外政策（1856-1914）

研究課題名（英文）Muslim Administration and Foreign Policy in the Southern Frontier of the Russian Empire, 1856-1914

研究代表者
長縄 宣博（NAGANAWA NORIHIRO）
北海道大学・スラブ研究センター・准教授
研究者番号：３０４５１３８９

研究成果の概要（和文）：
本研究は、ロシア帝国南部辺境のムスリム政策を取り上げ、そこで展開される帝国間関係と現地のムスリム社会との相関をシステムとして説明しようとするものだった。その際、ロシア帝国とオスマン帝国を往来する巡礼者等に特に着目した。それは従来、非対称性が著しかった、ロシア帝国のイスラーム研究と中東研究との接合を目指すものだった。このような観点の研究は、北米の研究者が最先端にいるので、この萌芽的な研究を発展させるために、彼らと活発に議論を行い、研究者ネットワークを構築した。

研究成果の概要（英文）：
This study has attempted to draw a systematic picture of interactions between empires' rivalry and indigenous Muslim communities in Russia's southern frontier, focusing on Muslim travelers between the Russian and Ottoman Empires. It aimed at bridging the divide between the study of Russia's Islam and the Middle East studies. This grant enabled me to develop this early-stage post-doctorial project by discussing with cutting-edge North American scholars, and to create network for the further cooperation with them.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2007 年度	1,000,000	0	1,000,000
2008 年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2009 年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総　計	3,200,000	660,000	3,860,000

研究分野：複合新領域
科研費の分科・細目：地域研究・地域研究
キーワード：イスラーム、帝国、地域研究、中央ユーラシア、ロシア史、オスマン帝国

１．研究開始当初の背景

ロシアは、ソ連崩壊やチェチェン紛争からの連想で、数世紀来、「文明の衝突」の最前線だったかのように考えられがちである。しかし、ロシア帝国は、ロシア正教会を優位に、様々な宗教に属する人々が、各々の言葉で神とツァーリに祈りを捧げるという統治秩序を長期に渡って持続させていた。もちろん、ムスリムも例外ではなかった。実は、こうした仕組みが解明され始めたのは、近年のことにすぎない。D.Iu. Arapov の 2004 年の本は、帝国全域の複雑なムスリム統治制度を眺望

した。Robert Crews の 2006 年の本は、国家が「イスラームの正統派」を規定し、ムスリム住民がその正統派を積極的に担うという相互依存に帝国の安定性を見出した。

これらの成果は、過去十年間に、国民国家やナショナリズムを相対化する方法としてのロシア帝国論が進展したことと無関係ではない。しかし最近では、一国完結型の帝国研究が、帝国関係論の中で相対化されつつある。その代表的な成果が、ロシア帝国とオスマン帝国を同時に捉える 2003 年の Michael Reynolds と 2005 年の Eileen Kane の博士論文である。それらが提起しているのは、単なる外交史でも、比較研究でもない帝国関係論の構築の可能性である。こうして今日、帝国間関係が具体的に展開する場として、諸帝国の隣接する境界地域に焦点が集まっている。境界地域の研究は、各帝国の内政史研究にも極めて重要な意味を持つ。なぜなら、境界地域における帝国間の競合こそが、各帝国内の大再編をもたらしたからである。クリミア戦争後に、ロシア帝国で大改革が始まり、オスマン帝国で改革勅令が発されたのは偶然ではない。

２．研究の目的

本研究は、ロシア帝国南部辺境のムスリム政策を取り上げ、そこで展開される帝国間関係と現地のムスリム社会との相関をシステムとして説明しようとするものである。ロシア帝国には、ムスリム聖職者を組織化し、それを介してムスリム住民を統治する宗務局という制度が、南ウラルのウファ、クリミア半島のシンフェロポリ、南コーカサスのチフリス(現トビリシ)にあった。本研究の第一の課題は、解明が著しく進んでいるウファの制度を比較の軸としながら、未だ十分に解明されていない他の宗務局と現地ムスリム社会との相互関係を分析することにある。そして、この相互関係に、辺境地域の帝国間関係がどのように織り込まれていたのかを検証することが、第二の課題となる。帝国間関係では、オスマン帝国が最重要アクターとなるが、南コーカサスではムスリム住民の大半がシーア派だったので、カージャール朝イランは不可欠のアクターとなる。本研究は、中央アジア征服の背景となり、ムスリム政策の転換期ともなったクリミア戦争後から、諸帝国の秩序が新たな局面に入る第一次世界大戦前夜までの時期を対象とする。

３．研究の方法

本研究は、地域間比較を最も重要な方法とした。それは、単なる研究手法以上の意味を持っていた。なぜならロシア政府は、版図内のムスリム諸地域だけでなく、他の宗教共同体も参照し、さらには諸帝国の政策も比較考慮しながら、ムスリム政策を立案・遂行していたからである。つまり、ロシア帝国のムスリム政策は、比較の視点なしには、十分な理解を得ることはできない。よって、本研究の直接の対象ではないが、研究蓄積のあるトルキスタンも、重要な比較対象となる。

クリミア・南コーカサスの宗務局とムスリム社会との相互関係について実証的な研究を行なうには、中央（サンクトペテルブルグとモスクワ）と地方の文書館で未公刊資料を発掘することが不可欠である。しかし、その作業を効果的に進めるには、公刊資料や定期刊行物から構築可能なある程度の全体像を持たなければならない。本研究は、とりわけ地方紙の情報を重視した。

４．研究成果

(1)　19 年度は、ロシア帝国とオスマン帝国を往来するムスリムの視点から、両帝国関係やそれを取り巻く国際秩序を分析した。研究計画では当初、ロシア帝国のムスリム統治機構である宗務局を軸に据えていたが、それに関する最重要史料を所蔵する国立歴史文書館の閉鎖が長引いているため、視角を変える必要に迫られた。そして、近年の研究成果や国内で入手できる史料を整理する中で、国家の威信や影響力が、大使館・領事館の活動によっても生み出される側面により注目するようになった。11 月にアメリカ・スラブ研究促進協会（AAASS）の年次大会で、越境者から見たロシア帝国・オスマン帝国・ガージャール朝イランに関するパネルに、報告者として参加できたことは大きな収穫だった。

資料収集としては、2 月 14-29 日にモスクワに滞在した。ロシア帝国外交文書館にある、外務省トルコ課と在イスタンブル・ロシア大使館の文書は、ロシア政府が、オスマン帝国を往来する臣民を、オスマン帝国に影響力を行使するための重要な資源と見ていたことを示していた。国立軍事史文書館では、陸軍省がムスリム軍人を巡礼者に扮させ、メッカで諜報活動させていたことに関する文書を閲覧した。国立図書館別館では、メッカ巡礼者の紀行やムスリムの新聞の調査を行なった。

(2)　20 年度は、研究課題に関する国際的な研究協力体制を作り上げる上で、意義深かった。まず 9 月 19、20 日に、東大のイスラーム地域研究の支援を得て、ロシア連邦のカザンで、国際ワークショップを組織した。ヴォルガ・ウラル地域は、地域間比較の格好の題材を提供してくれると同時に、とりわけ、帝国、イスラーム、民族という問題群の重要な結節点

の一つである。この研究集会は、歴史研究を中心に、過去十年の目覚しい成果を総括すると同時に、さらに新たな研究課題を模索すべく、日本、ロシア、アメリカ、ドイツ、トルコ、フランスから新進気鋭の若手とベテランの研究者を結集した。

11 月には、AAASS と中東学会(MESA)で、コロンビア大学ハリマン研究所のポスドク研究員 James Meyer とニューヨーク大学で博論執筆中の Lale Can (身分はいずれも当時)と共に、Mobility across Empires というパネルを組織した。我々のパネルは、交通機関の発達によって世界が結ばれていく 19 世紀において、巡礼などを通じてムスリムが作り出すネットワークと、それを統御しようとする国家権力や諸国家の協働体制との相互関係を、未公刊の文書やムスリム自身の記録から明らかにしようとするものだった。

資料収集の点では、研究集会を組織したカザン大学で集めたタタール語史料が重要だった。本研究課題では、ムスリム社会内部の資本配分とロシア政府との相互関係を見るために、ワクフ（財産寄進制度）を重視しているが、特にこの点で収穫があった。

(3) 最終年度の課題は、①ロシア帝国がどのようにオスマン帝国領内で「イスラームの庇護者」として振舞おうとしたのか、②ムスリム社会内部の資本配分とロシア政府とはどのような関係にあったのか、という問いから構成されていた。①については、9月に、入館許可を得るのが困難なロシア帝国外交文書館で重点的に史料収集する機会に恵まれ、国家の威信や影響力が、宗教権威だけでなく、大使館・領事館の活動によっても生み出されることを示す極めて貴重な資料を閲覧した。そこからは、メッカ巡礼者をはじめとする、ロシア帝国とオスマン帝国を往来するムスリムと外交官との関係だけでなく、ロシア帝国の外交官がムスリムの移動を取り巻く国際環境をどのように認識していたのかも読み取ることができた。ところで、このような観点の研究は、現在、北米の研究者が最先端にいる。したがって、本研究で積み上げてきた実証的な成果を理論的に発展させるためには、彼らとの議論が不可欠だった。とりわけ、学会発表の項の①は、米国国務省の奨学金も得て行われた。

②の問いでは、前年度集めた史料に基づいて、ワクフ制度の分析を行った。ワクフ研究は、イスラーム研究上の最重要課題の一つだが、ロシア帝政期のワクフ研究は、ようやく始まった段階にすぎない。最終年度には、ロシア帝国下のワクフ研究序説のような論文を『イスラム世界』に発表できた。それは、ヴォルガ・ウラル地域、西シベリア、トルキスタン、クリミア半島のワクフの比較を行い、なおかつ問題の所在を他のイスラーム地域研究者にも提示しようとしたものである。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 2 件）

①長縄　宣博「帝政ロシア末期のワクフ：ヴォルガ・ウラル地域と西シベリアを中心に」『イスラム世界』73 号、2009 年、1-27 頁。

②長縄　宣博「ロシア帝国のムスリムにとっての制度・地域・越境：タタール人の場合」宇山智彦編『講座スラブ・ユーラシア学』第 2 巻、講談社、2008 年、258-279 頁。

〔学会発表〕（計 5 件）

①Norihiro Naganawa,“Muslim Travelers and Empire: Local Politics and World Order in Late Imperial Russia,” Junior Scholars Training Workshop “Mobility in Russia and Eurasia” (U.S. Department of State Title VIII Program) University of Illinois at Urbana-Champaign,USA(17 June 2009).

②Norihiro Naganawa,“Challenge and Leverage: Muslim Travelers from the Volga-Ural Region to the Ottoman Empire at the Turn of the Nineteenth and Twentieth Centuries” at the 42nd annual meeting of the MESA (Middle East Studies Association) (Washington D.C.,USA, November 25, 2008).

③Norihiro Naganawa,“Voyage and Politics: Muslim Travelers from the Volga-Ural Region to the Ottoman Empire at the Turn of the Nineteenth and Twentieth Centuries” at the 40th annual convention of the AAASS (Philadelphia,USA,November 21, 2008).

④Norihiro Naganawa,Мусульманское сообщество в условиях мобилизации: участие Волго-Уральских мусульман в войнах последнего десятилетия Российской империи // Волго-Уральский регион как перекресток Евразии: империя, ислам и национальность (Kazan,Russia,September 19, 2008: International Workshop organized by Islamic Area Studies Center at the University of Tokyo and Slavic Research Center http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/eng/2008 0919/20080919-e.html)

⑤Norihiro Naganawa,“Letters from Istanbul: the Ottoman Empire and the First Balkan War

Observed by a Tatar Intellectual" at the 39th annual convention of the AAASS (American Association for the Advancement of Slavic Studies) (New Orleans,USA,November 15th, 2007).

〔図書〕（計 0 件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

６．研究組織

(1)研究代表者

長縄　宣博（NAGANAWA NORIHIRO）
北海道大学・スラブ研究センター・准教授
研究者番号：30451389

(2)研究分担者

（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者

（　　）

研究者番号：